

【講演概要】

・江戸期「侠客・親分・やくざ」の世界

「親分」は司法制度を補う存在であり、「やくざ」は親分の一部が変質したものです。民間経済が振興して多くの人や金が動き、天領や小藩乱立など警察力が弱い地域に多く存在しました。「やくざ」の世界には、「義理」により結ばれた独特のネットワークがあり、集団的安全保障のような機能がありました。旅をすることも多く、旅の様子や持ち物、旅先での「仁義」なども語り継がれています。

・清水湊の風土と次郎長の人物像

清水湊は戦国期以来の軍港であり、諸国との交流が多く、人の気質は開放的です。落語家春風亭昇太によれば「清水港にはゆるい風が吹いています」。次郎長の性格はこのような風土と無縁でなく、だれでも受け入れ話好きで、人がよい反面で裏切られた時の怒りは激しく、子分や朋友に対する思いは非常に強く、特定の政治信念を持たず、時勢に逆らわず、高位高官に対しても自然体で接することができる、などといえるでしょう。海軍中将小笠原長生は著書で「訥弁で能弁」と記しています

・江戸期の次郎長

1820年(文政3)、清水湊の舟持ち船頭で薪炭業の高木家に次男・長五郎として生まれ、3歳で近所の米穀商山本治郎八の養子になりました。「治郎八の家の長五郎」から「次郎長」になりました。23歳で家督を捨て、やくざの道に入り、三河へ走ります。

三河は次郎長の第二の故郷になります。30歳代～40歳代の行動には正確な記録が乏しく、後世の多くの物語は次郎長の口述を記録した「東海遊侠伝」によっています。

多くの事件を引き起こし複数の人を殺しましたが、理不尽な仕儀に対する復讐として説明できるものが多く、大衆の前で行われ、「男をあげる」結果になりました。集大成は荒神山の喧嘩です。

・明治維新後の次郎長

幕府が崩壊し、徳川家が駿河に移封されて駿河府中藩になり、廃藩置県により静岡県になると、多くの高官との出会いがあります。中でも山岡鉄舟との邂逅は次郎長を変えたといわれます。咸臨丸事件、三保神社神主殺害、妻(二代目ちよう)殺害など様々な事件に遭遇します。県の依頼による富士裾野開墾事業や地元経済界を支援する様々な活動も知られています。私生活では4人の妻を持ちましたが実子はなく、養子の子孫の存在が現在も知られています。1893年(明治26)自宅の船宿「末廣」で医師や家族に見守られて73歳の大往生をとげました。その葬列の長さは2kmのも達したといわれます。

・次郎長と娯楽メディア

次郎長は、映画・浪曲・小説などで全国的に有名でした。次郎長自身が当時の同業者と違って自己PRに熱心な人でした。慶応2年には自宅に居候していた旅回りの講師師松廻家太琉(売講子清龍)をあたかも従軍記者のように荒神山に派遣しました。太琉は講談師として大成しませんでした。コンテンツは神田伯山(講談)・廣澤虎造(浪曲)に引き継がれてゆきます。明治11年には元磐城藩士天田五郎に過去の武勇伝を口述筆記させ、これが明治19年に東京で出版され評判になると、これをもとに多くの大衆小説が生まれ、さらに映画化されました。次郎長に関する評伝は約60点、映画は約90点といわれます。最近では、これらの娯楽メディアはすっかり影を潜め、映画も2008年の「次郎長三国志・中井貴一主演」以来途絶えています。清水次郎長の時代も過去のものになりつつあります。

以上